

## 爽やかな敗北、見苦しい失格

オリンピック男子競泳、平泳ぎの200メートル決勝で、立石選手が3位に入り、北島選手は4位に終わりました。

北島選手については、競泳平泳ぎ100メートル、200メートルでの3連覇が期待されていましたが、結果は、新旧交代を印象付ける事になりました。

北島選手は、前半は非常に良いペースで全体を引っ張る形となり、それが優勝タイムの世界新に繋がったのではないかと思います。ただ北島選手は、最後のところでそのスピードについていけず、4位に沈んでしまいました。

レース終了直後に、プールの中で北島選手が立石選手の銅メダルを祝福しているシーンは感動的でした。

北島選手は「メダルを取れなかったのは悔しいけど、諒がメダルを取ってくれたので悔いはない。」「前半からとばしたのは、今の自分にできる精一杯の泳ぎ。この4年間は自分への挑戦だった。ここまでサポートしてくれたすべての人に感謝したい」と語っていたのは、とても爽やかで印象的でした。

北島選手の立ち居振る舞いを見ながら、アスリート達はその持てる力と技の限りを尽くして闘う、その姿に人々は感動するのだということを改めて感じました。

さて、オリンピックというような大舞台では様々なトラブルがつき物とはいえ、先日行われた女子バドミントンで、負けを狙った「無気力試合」をしたとして中国、韓国、インドネシアの4組8人が失格になったという問題は、前代未聞であり、折角のオリンピックが後味の悪いものになってしまいました。女子ダブルスの1次リーグ最終戦、中国ペアと韓国ペアの対戦会場では、余りの無気力ぶりに、満員に近い観客からは地鳴りのようなブーイングが響いたとのこと。その直後に行われた韓国とインドネシアの対戦でも同様のことが起きています。

失格処分理由は「試合に勝つために最大の努力をしなければならない」という世界バドミントン連盟規則に抵触したためということですが、失格となった4ペアは、いずれも最終戦を前に決勝トーナメント進出を決めており、最終戦の勝敗で準々決勝の相手が決まることになっていました。このため、決勝ト

ーナメントでは強敵と対戦しないよう、また、同じ国のチーム同士がぶつからないよう、それぞれ負けを狙ったとされています。

中国では、失格になった選手が引退を表明する事態となっています。今回の一件について、トーナメント戦ではなくリーグ戦にしたことが原因という話もありますが、「無気力試合」を制度のせいにするのは潔くありません。

また、「やるからには勝ちを目指すべきだ」「戦略として当然」など様々な意見が出ていますが、常に忘れてならない事は、オリンピックの精神であり、一生懸命応援している人々の存在でしょう。

いくら戦略、戦術といっても、負けるために戦うなどという事は八百長試合でもない限り有り得ないでしょうし、そんな試合を見せ付けられる観客はたまったものではありません。

また、失格の議論にはなっていませんが、なでしこジャパンが南アフリカとの試合で意図的に引き分けを狙ったというのも、私は問題だと思っています。特に、監督の発言としては、軽率だったというしかありません。

なでしこジャパンの佐々木監督は、南アフリカ戦の試合後、「引き分けを狙いに行った」ことを表明、後半から投入した川澄には「ゴールを狙うな」と指示をしたといいます。私は、テレビで監督の話を聞きながら、始めは「点数を取れなかった負け惜しみかな」と思いましたが、良く聞くと随分と傲慢な態度であり、南アフリカ選手に対しても非常に失礼なことだと不愉快に感じました。だいたい、点数が入らずはらはらしながら応援していた日本のファンの事を、どう考えているのでしょうか。

「オリンピックで重要なことは、勝つことではなく参加することである」これはオリンピックの理想を表現する名句として知られています。すなわち、オリンピックは、ただ勝てば良いという事ではないということです。オリンピック憲章の「オリンピズムの根本原則」には「オリンピック精神は友情、連携そしてフェアプレーに基づく相互理解が必須である」と謳われています。そして、オリンピズムが求めているのは「文化や教育とスポーツを一体にし、努力のうちに見出されるよろこび、よい手本となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などをもとにした生き方」の創造なのです。

手抜きの無気力なプレーがフェアプレーとは思えませんし、努力のうちに見出される喜びとも感じられません。

オリンピックが、世界中からトップアスリートが集い、互いに競い合い、高めあう最高の舞台である事を、競技関係者には忘れて欲しくないと思います。

(塾頭 吉田 洋一)

